

# 100文字！?書評コーナーのつづき！

## 「噛み合わない会話と、ある過去について」

辻村深月 講談社

「嫌な気持ち」になる本だった。

詳しく言うと、自分事にとらえすぎて嫌な気持ちになるのである。最初は、本の表紙に惹かれて読み始めてみた。しかし、読んでいる途中で「あれ？」という気持ちになる。

この小説は4つの短編集で構成されているのだが、それぞれに歪みがある。その歪みに気づき、それぞれの結末に救いを求めながら一冊をあっという間に読み終えてしまうのである。読了し、レビューか何かを見ると、「読者によってスカッとするか、モヤモヤするか分かれる」と書いてあった。確かにそうだと思う。しかし、すべての話でスカッとする人はいないのではないか。モヤモヤという気持ちは、「じゃあ登場人物はどうすればよかったのか」ということに考えを巡らせる。それが徐々に自分自身の思い出とリンクして「じゃあ自分はどうすれば良いのだろうか」ということにと主語が変換されるのである。だから、嫌な気持ちになる。小説の中で答えが出ているものもあるが、それを過去に導き出せなかったから、その結末がある。多分謝ればいいってもんじゃない。私も考えてみたけど、しっかりとした答えが出せずにいる。どの答えも自己満足で完結してしまう気がするからである。自己満足でも良いのであれば「忘れない」ことであると考え。「読んで嫌な気持ちになったことを忘れない」とか、「故意の有無にかかわらず、傷つけてしまった過去を忘れない」とか。誰でも思わず人を傷つけてしまうことはあると思う。そこで謝って完結ではなく、**忘れないことで、より人にやさしくできるのではないか。**

この書評を書くにあたってもう一度この本を借りて読んでみたが、相変わらず嫌な気持ちになる。しかし、あることに気付く。それは相手も不完全な人間だということだ。題名にある「噛み合わない過去」、そして考え方がそうさせている。そこに救いを見出してしまった。そんな私はどうすればいいのか。答えが出ない。

